



障害をもつ幼児の保育(10)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

ゲスト・玉木喜美子 (T)

言葉のない子の「コミュニケーション」

毎朝意気込みをもって学校に来る

M:今日は、愛育養護学校で長年保育をしておられるT先生に来て頂きました。ちょうど今手を使うことの話

しているところです。指さしは決して自閉症の特徴ではないということをご話しました。指さしをする前に子どもは大人のそばに近寄ってきます。それは何か話をしたかと思ってるんじゃないかと私は思ってるんで

す。今日話に出るS子さんは毎朝登校すると、待ちかねたように隣の幼稚園に行きます。

この日もいつものように幼稚園に行ったとき、その日がいよいよ劇の最終の稽古の日で、子どもたちは舞台の上に乗ってやっていたんです。

F 衣装も着けて？

M ええ、衣装も着けて。S子さんは、僕の膝の上に乗って三十分くらいじーっと動かずに見てるんです。いつもだったら少しするとあっちの部屋、こっちの部屋へと動くんだけれども、こんなにゆっくりと僕の膝の上に乗って見てるってことにね、僕は非常に驚いたんです。

S子さんは演出家

M そして昼過ぎに学校に帰ってきたら、しばらくしたらS子さんが学校の大人をつかまえて、劇遊びをやっているんです。

T それは、白雪姫をやっていたんです。

その日は誰が白雪姫をやっていたかしら。

M S子さん自身じゃない？

T S子さんはね、もうこの頃白雪姫の衣装を着ないんです。演出家に徹してるんです。

M 私が見たときにはリンゴを実習生のYさんに食べさせていた。

T じゃあやっぱりYさんが白雪姫だったんですね。その日の出来事っていう風に限定はできないんですけど、その頃S子さんがよくやっていた遊びは白雪姫で、だれかを白雪姫に見立てて彼女がリンゴを差し出すんですね。白雪姫がそれを一口ばかりと食べるとウツとのどに詰まらせて倒れる。そうして他の大人や子どもを集めてきて、その倒れて息が出来なくなった白雪姫の周りに集まって、おいおいと声を上げて泣くんです。S子さんは周りの人がおいおいと泣き悲しんでいる様子をすごくよく見ていて、その場面を何度も何度もやり直させるんです。私たちは白雪姫のストーリーを知っているだけに次

の展開をしなくなつて、倒れた白雪姫のほつぺたにキスをして白雪姫が目覚めるつていう所に行きたがるんだけど、S子さんはまたその復活した白雪姫の口にリンゴを食べさせて。

F 面白いですね。

T 小人たちが白雪姫の死を悲しんで泣くつていうところを、何度も何度もやるんですよ。

F そういう演出家としては、この人は言葉なしでどういふ風に指示するわけ？

T ええとね、最初に泣けつていふ風にはいわなかつたと思ふんです。ちよつと離れた所にそばにいて立つていてちよつとこう口元にね、笑いを浮かべながら見てるつていふ風ですね。

M 僕は幼稚園から帰つたばかりで弁当を食べようと思つてたら、S子さんが僕の手をぐいぐい引つ張つて三角の帽子をかぶせて小人にさせるわけ、そしてその実習生さんの倒れてるところに連れてつてここで泣けつてい

うのね。ただ泣いたんじゃダメでね、実習生さんの上にこうかがみこんでね、そして泣けつて、もつと泣けつて。

T そうですね。実習生さんが女性のスタッフだったので、津守先生がねちよつとためらつてるんです。私たちは実習生さんの体をこう揺すりながら倒れた白雪姫を揺すりながらおいおいと声を上げて泣くんですけど、津守先生はやつぱり相手が女性なので触れるのをためらつてたらね、その手をぐつとこう実習生さんの背中の所にまで持つてきて、こうさすつて泣けつていふことを求めましたね、あの時は。

かならず伝わるという信頼

M それで僕もね、ああと思つたんです。ああこの人は白雪姫をやりながら、泣く場面を、特別に強くやつてんだつてことがそのころになつて初めて分かつた。

F もう初めから白雪姫だつてことは分かつたの？

T えつとね、一番最初はリングオですね、プラスチックのリングオを食べさせるっていう場面から始まったんです。だから白雪姫っていう設定から始まったのではなく、そのオモチャのリングオを口にして、相手のスタツフがウツとこう倒れるというところから発展していった遊びだったんですね。S子さんはビデオをよく見ているお子さんなので、白雪姫の話は下敷きとしてはあったと思うんです。

M 実習生さんと僕の他にもいろんな人を、引っ張ってきてね。

T 主に白雪姫になるのは若い男性のスタツフで。他のスタツフは大体小人役で、劇遊びが発展するようになって少し小道具を買ったんですね。帽子を買ったりとか。それで少しふくらんだんですね。ただS子さんの一番の関心事は、その中でもやっぱりこう倒れた白雪姫の周りで悲しんで泣くっていうところが一番のポイントなんだと思うんです。

身近な人の死と赤ちゃんの誕生

T その劇遊びを始めた時に、S子さんの様子を見ていた別のスタツフがね、二年くらい前に亡くなられたおじいちゃんやまの死と重なって見えるっていう風な印象を持ちました。私自身はあんまりそういう風に重ねては見なかったんですけどもS子さんの遊びを見ているととっても生きることと死ぬことをテーマにしている遊びが多いように思うんですね。お母様が出産される時にはまだお腹に赤ちゃんがいた時だったんですけども、砂場にこう大きな穴を掘って自分がそこに頭から入って丸くなってみたりとか、それをその日始めてきた実習生が見ていて「なんだか胎児のようだね」って言って、初めての人にもそういう伝わり方をしたっていうのがとて



も印象深かったですね。それからあの人の好きな遊びの中で、昆虫を選んでそれを丹念に見て、青虫なんかを蟻の巣の中に落としてみて蟻が群がる姿を見てたりとか、すごくそういうテーマが多い人だということとは感じますね。

M そもそも僕とS子さんとの出会いもその関連だということになって分かりました。僕がS子さんとはとんどつき合もない時に、そつと来て僕の後ろから手を触つたことからS子さんとのつき合いが始まって、それからもう一年以上になりますね。

T やはりおじいさまが亡くなられた後でしたよね。

M そうです。

F 死ぬ場面っていうのはS子さんにとって、体を揺さぶったり周りの人が泣いたり大騒ぎするっていう、そういうことなのかしら。

T うーん。その大騒ぎっていうより、もつとこう深いかなしみっていうか、そういう思いをあの人が再現させ

てるっていう風に私はとらえていますけれど、その形のことじゃなくて思いの部分でそういう劇遊びの形を取って追体験しているような印象を持ちます。

分かってもらえなくても努力する

M その劇遊びをやったその日の前の時間に幼稚園に行つた時に、欠席の子どものロッカーを見てこの子が欠席なんだよって、鞆がないからすぐ分かるからそうやって僕に知らせてくれるっていうことがありましたね。その前の日も更にその前の日もそれはあつただけで、その日はね、Sさんがさわっていた一つのロッカーに鞆がかかっていた。だから僕はそのロッカーの子どもは欠席じゃないと思った。それでもね、Sさんはどうしてもその子のところをね、ドンドンたいて僕に何か知らせようとするのね。あんまり大きな声を出すので、他の子どもたちが「あ、その子、鞆があるけどね、欠席なんだよ」って教えてくれた。鞆がおいてあつてもその子は

欠席でね、先生がね「そのお子さんは、午後になって来るかもしれないんです」で私に教えてくれた。そういう細かいことをね、S子さんは分かっているのね。分らないのは僕だけ。そういう場面というのが他にもきつとあるんじゃないかということを、僕はこの日はとつても思っただんです。

死と欠席―不在のイメージ

F じゃあ、死つていうのは欠席みたいなものなのかしら。

M 欠席というのは死みたいなのなのね。

T いないっていうことだね。

F その場にいないっていうことは。

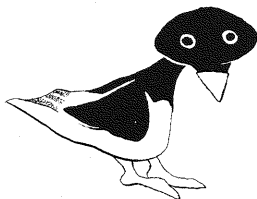
T おじいちゃまが亡くなった時の思い出みたいなものは、なかなかその当時のS子さんの様子からだと察せられない感じでしたね。だから今のその白雪姫の遊びがそのことと本当に直接結びつくことかどうかっていうこと

は分からないけれども、本当にそういう意味ではS子さんは「悲しい」とか「どうしておじいさん、いなくなつた」っていうことを、言葉で表現したわけではない。家庭からもそういうような説明はなかつたんですけれども、そういう遊びの中で、S子さんが心の中に持っていたことを表現出来る機会になっているのではないかと思えますね。本当にそういう意味ではS子さんはとても表現する力の旺盛な人なんです。

M その大きな声を出したりドンドンたたいたりするのは、知らない人から見たら変な事してるとしか見えないかもしれないけど、そうじゃないっていうことはね、ここまで話してくるとよく分かりますね。

F そして隣の幼稚園の子どもたちがそれをある意味では理解してくる。

M 僕よりずっと早くに分かつ



ている。

理解されない時には

ドンドンたたいたり大声になる

T そうですね。そういう意味ではS子さんは他の人に対してとても信頼の気持ちを見せていて、自分の理解者になつてもらえるつていう、自信を幼稚園の中で育ててきたと思います。

M 今のロッカーの場面でも、みんなが分かつたらもうそれでピタツと大声も出さない。

T 本当にね、時々S子さんと一緒に行く私は、クラスのひとつりひとつりのことは分からないけれども、S子さんは皆のことを把握しているんですね。いつの間にか。

M S子さんが劇遊びで何かを言おうとしてるつていうようなことは、今の白雪姫の劇遊びの他にもあるんですか。

T 劇遊びについてはもう今はこれですね。こちらの思

惑としてはS子さんにも劇の登場人物になつて、劇のなかの人物になる楽しさを体験してほしいつていう気持ちがあつたんですけど、どういうわけか今はもう徹底して演出家なんですね。人を呼んできて役をあてがつて自分はそれを離れたところから見ている。だから全体を把握しているという役取りをして、コーディネートの役を今はしているんですね。衣装を着てみないつて誘つても、今は絶対それは拒否するし。だから幼稚園に行つても全体を把握するつていう今のS子さんと共通するものがありますよね。

F 演出家になるつていうのはどういう意味があるのかしら。

T どういう意味があるんでしょうね。

F 物語の中の一登場人物ではなくて。

T そうなんです。

F だから時間的に言えばもう過去のことを、離れた距離から見る、全体を見るつてことは未来じゃなくて過去

のことは見ることで出来るのかしら。

M 人によってはそういう演出家になりたいと思う人もあり、人によってはそれじゃダメでその中の一員の俳優になりたいと思う者もあり、人によってそれぞれなんでしょうね。

子どもの悲しみ

F S子さんは泣きますか？

T 減多に泣かないですね。怒り泣きはありますけれども悲しくて泣くっていうことにはないですね。

F 怒るっていうことはどの子も出来るじゃない？ 怒ることは割にやりやすいんだけど、悲しむってことは難しいことなのかしら。

T M先生はS子さんが泣いているのを見たことがありますか、S子さんが悲しくて泣いているのを。

M 僕はあんまりそういう場面、S子さんについて見たことはない。

F 怒ることと悲しむことは違うことなのよね。悲しむっていうのは自分の中に深く深くそのことが入って行くわけじゃない？ そして怒るっていうのは外の人をダメだつて叱ったり怒ったりする事だから、悲しむことの方がもつと辛いことよね。

T そうですね、そういう話、学校のミーティングでも話題になったことがあります。怒り泣きはありますけど本当にこう何かさめざめと泣くとか、しくしく泣くみたいな場面はないですね。ただ今の生活のありようとか、S子さん自身がとても理不尽に思っていることとか、なかなか家庭の中でも分かってももらえないこととか、どんなに悲しいだろうってこちらは推測するようなことはいっぱいありますよね。でもやっぱりS子さんの様子を見ると、地団駄ふんで怒って泣くみたいな表現はありますけど、悲しむとかっていうのは今のところないですね。

T どちらもそれぞれね、色んな人がいると思う。どつ

ちが得意かっという言葉は当たらないけど。こっちは出来るけどもこっちは出来ない、こっちはするけどこっちはしないっていうようなね、大人はそれぞれみんなあるんじゃないかしら。演出家つてのは今のS子さん見てると、ああこういう人なんじゃないかなと思いますね。

S子さんが例えば幼稚園に行った時に舞台を見る時でも、あの人はね裏側も見ようとするんですよ。舞台の裏側。人形劇の人たちがボランテシアで来てくれた時も、表の楽しさの他に裏はどうなってるかっというのを必ずあの人は見ようとするんですね。そういう視点がすごくS子さんらしいなと私は思っています。だから事の全容がどうなっているかっということをあの人は知りたくてたまらない。表だけじゃなくって裏ではどういう風にな人が動くのかとか、どういう仕組みになっているのかっということを知ろうとしているように見えるんですね。そういうような自分を取り巻く事柄の把握をしようとしているように見

えるんですね。

子どもは全容を見る、

大人は一部で分かったと思う

F 子どももつていうのは言葉があるとかないとかっというそういうことを取り払って考えて、全容を見たいと思うのかしら。部分じゃなくて全部知りたいという気持ちがあるのかしら。

T お子さんによつてもね、本当にこう極端に正面だけ見てる人もいますよね。けれどもSさんはそうじゃないんですね。裏側も見たい人もいますね。

M うん、うん、前に話した子どもにもそういう人がありましたね。

T 疑い深さって言ったら変な言い方だけでも、人を疑ってかかっている子もいましたね。

F ええ、ええ、大人の本心はどこにあるのかっという。

T 本心はどこにあるのかってね。S さんが裏側を見ようとするのはそういうのとも違う感触なんですよ。そこを言葉にして考えたことはまだないんですけどね。この演出家、もうちよっと早い時期には白雪姫の衣装をまとうて自分がお姫様になることをやってた時期もあるんですよ。だけど今どうして彼女が演出家の立場に徹したかと思ってるのか、その気持ちももう一つ私には理解出来ないところがあって、まだその様子を見てるという段階なんです。ただ幼稚園でのいかたとか、幼稚園でのS さんの立場とか、そういうものと重なるものもあるのかもしれない。あの人の世界の捉え方みたいなのが、いま一つ考えきれないところなんです。

M 大人っていうのは、見えたところで一面的に見てそれで結論を出してしまうっていうね、そういうのが大人の習癖ではないだろうか。そうすると子どももっていうのは大人が普通に考えてるよりもっと多くのことを分かっていると僕は思うんです。それは愛育の子どもたちに

ついても全くそうで、大人はちよっと見てこの子はこれが分かるとか分からないとか、それで済ませてしまうけれども、そうじゃなくてどの子どものこと考えても大体において我々が分かっていること以上に、全体のことをね、あるいは全体の一番大事なところを分かっている場合が多いような気がする。そのズレっていうのがね、特に障碍をもった人たちが世の中から理解されない部分になってるんじゃないかしら。

T S さんは探求型の人ですよ。それがとっても面白いんです。あの人のそばにいて。
(以下次号)

